



児童教育実践についての研究助成

研究紹介ファイル 2023

vol.11

多文化共生へのアプローチ — 外国にルーツをもつ子どもたち、家族への支援 —



岐阜県可児市 文化創造センター「多文化共生プロジェクト」より

私たちは、この助成によって生まれた「縁」を大切に、
過去の助成研究の中からいくつかの研究をピックアップし、
応募に至るまでの背景や問題意識、その後の発展や新たに生まれた課題、
さらには研究の社会的意義についてもレポートしてまいります。
これから応募を検討されている皆さまに、
当財団が助成してきた幅広い研究分野を知っていただくとともに、
独自の視点で研究に挑む信念や研究成果を生み出すことへの情熱、
専門家としての誇りなどを感じていただければと思います。

公益財団法人
博報堂教育財団



これまでの研究紹介

★ 研究代表者の所属・役職は発行当時のものです。

2016.07.01 発行

vol.1 読み書き障害をかかえた子どもたち —
発達性ディスレクシア

File No.1 原 恵子 氏（上智大学 大学院言語科学研究科 准教授）

File No.2 奥村 智人 氏（大阪医科大学LDセンター 技術職員、オプトメトリスト）

File No.3 三盃 亜美 氏（大阪教育大学 教育学部 特別支援教育講座 講師）

File No.4 関 あゆみ 氏（北海道大学大学院 教育学研究院 准教授）

2016.10.01 発行

vol.2 読書を科学する

File No.5 猪原 敬介 氏（日本学術振興会 特別研究員 PD）

File No.6 常深 浩平 氏（いわき短期大学 幼児教育科 専任講師）

2017.07.01 発行

vol.3 進化する授業
— 子どもたちの思考を深め、理解力をはぐくむ授業とは —

File No.7 鈴木 一成 氏（東洋大学 文学部 教育学科 准教授）

File No.8 寺本 貴啓 氏（國學院大学 人間開発学部 初等教育学科 准教授）

2017.10.01 発行

vol.4 まばたきで言葉をつむぐ、手話で想いを伝える
— コミュニケーション支援 —

File No.9 鳥居 一平 氏（愛知工業大学 情報科学部 情報科学科 教授）

File No.10 武居 渡 氏（金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 教授）

2018.07.01 発行

vol.5 “当事者”の思いに耳を傾ける
— 不安を解消し、健康的に過ごしていくための支援 —

File No.11 田部 絢子 氏（立命館大学 産業社会学部 准教授）

File No.12 涌水 理恵 氏（筑波大学 医学医療系 保健医療学域 発達支援看護学 准教授）

2018.10.01 発行

vol.6 日本語教育を考える
— 日本語非母語話者・児の視点から見えてくるもの —

File No.13 金 愛蘭 氏（広島大学 大学院教育学研究科 日本語教育学講座 准教授）

File No.14 櫻井 千穂 氏（同志社大学 日本語・日本文化教育センター 准教授）

2019.07.01 発行

vol.7 ことばの力
— ことばの力を育成する教育実践とは —

File No.15 高橋 薫 氏（早稲田大学 人間科学学術院 准教授）

File No.16 岸野 麻衣 氏（福井大学 連合教職大学院 准教授）

2020.10.01 発行

vol.8 「言語活動の充実」に寄与する授業実践
— 美術科と学校図書館の試み —

File No.17 臼井 昭子 氏（山形大学 産学連携准教授）

File No.18 桑田 てるみ 氏（国士舘大学 21世紀アジア学部 教授）

2022.03.01 発行

vol.9 実践をとおして掴む
— 障がい特性のある子どもたちの自助能力、主体性を育むために —

File No.19 堀 清和 氏（兵庫医科大学 公衆衛生学講座 研究員）

File No.20 藤井 裕士 氏（岡山県立岡山聾学校 幼稚部 教諭）

2022.10.01 発行

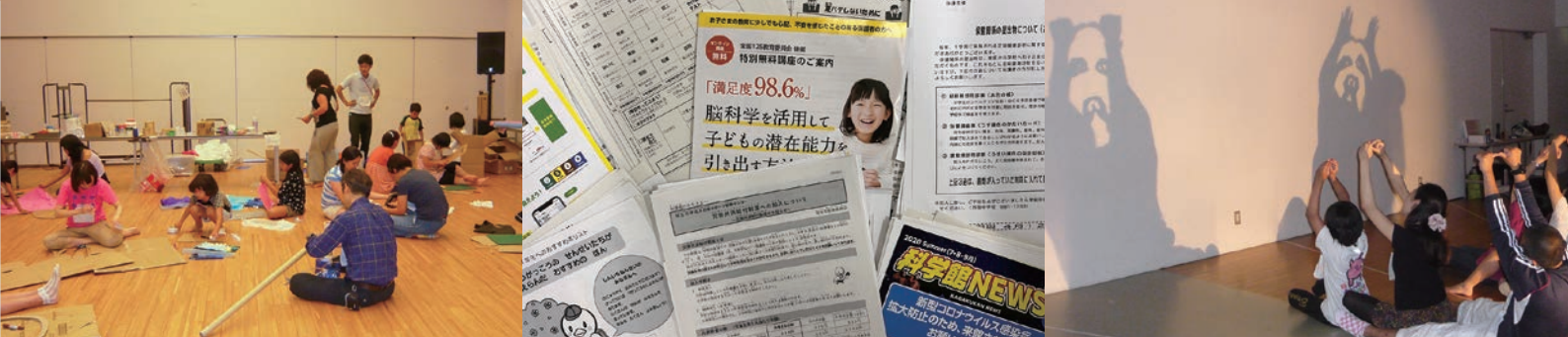
vol.10 聴覚障がい児への言語習得支援
— 英語音声の知覚・産出、漢字の読み書き —

File No.21 河合 裕美 氏（神田外語大学 児童英語教育研究センター 副センター長 准教授）

File No.22 茂木 成友 氏（東北福祉大学 教育学部 教育学科 講師）

「研究紹介ファイル」バックナンバーは、財団ホームページからもご覧いただけます。

<https://www.hakuhodofoundation.or.jp/>



多文化共生へのアプローチ ―― はじめに

「外国にルーツをもつ子どもたちは、支援されるだけの存在ではありません。」

今回のインタビューで得たこの指摘は、

外国ルーツの子どもたちへの支援に、新たな可能性を感じさせてくれる。

日本の学校では当たり前のことが、彼らにはどう見えているのか、どう感じているのか。

彼らの母語で、「学校」はなんと言うのか。

ことば、習慣、学校生活や家族との関係、日本と母国はどういうところが違うのか。

日本とは異なる言語、文化を有する子どもたちは、

母語話者にはもてない視点を提供してくれる貴重な存在でもあるのだ。

外国ルーツの子どもたちが抱えている困難はひとことでくれるものではなく、

容易に解決できるものではないが、

地域住民やボランティア団体が学校や専門家たちと連携してタッグを組み、

多言語多文化共生への取組みが、あちこちで芽吹き育っている報告は着実に増えている。

外国ルーツの子どもたちやその保護者が、日本の学校になじみ、

安心して生活できるようになるために、わたしたちに何ができるのか。

多文化共生へのアプローチを試みた研究を紹介する。

※この冊子では、「外国にルーツをもつ子ども」「外国ルーツの子ども」という表現に統一していますが、file No.24松井かおり氏の記事中は、氏の研究タイトルと同様に「海外にルーツがある子ども」「海外ルーツの子ども」としています。



研究代表者

 り
 李 暁燕 氏

九州大学 共創学部 准教授

第10回研究助成

生活者としての外国人保護者のための学校プリント研究

[助成期間] 2015年4月～2016年3月

第10回継続助成(アドバンスステージ)【長期】

生活者としての外国人保護者のための学校文書研究

[継続助成期間] 2016年8月～2018年3月(第10回継続助成)

日本で暮らす外国人保護者支援の視点で「学校プリント」に着目 「学校プリント」は日本の学校文化の覗き窓です

母国の外国語大学で日本語教育に携わり、日本語は「できるほうだ」と自信があった李さんが「わからない単語がたくさんあって驚いた」のが「学校プリント」だったそう。

「日本の大学院に通うため、子どもと一緒に日本で暮らし始めました。子どもが小学生になると、学校から毎日のようにプリントをたくさん持って帰るのですが、読むのに時間がかかり正直負担でした。書いてある言葉も、集団登校、体操服、通学路、給食開始日etc. 意味はなんとなく想像できましたが“なるほど!そういうことなのか!”と理解するまでに苦労しました。」

自身の実体験から、日本の学校教育においては、プリントの配布が学校と保護者の主要なコミュニケーション手段になっており、「学校プリント」には学校の文脈から離れると意味がわからない「学校カルチャー語彙」が多数存在することに気づいたという李さん。

「同じ境遇の、日本語を母語としない保護者(以下、外国人保護者)の役にたつ研究がで

きたらと思ったのです。」

子どもを日本の学校に通わせている外国人保護者の中には、「学校プリント」を読解できず日々ストレスを感じている人や、読んでもわからないのでつい後回しにしてしまい、学校との間にトラブルが発生してしまった人が少なくないという。彼らが安心して子どもを学校に通わせ、また、日本の学校教育を理解できるようにするため、李さんは日本語教育の視点＝外国人の視点から「学校プリント」の調査研究に着手した。

日本語教育の視点で 学校プリントを解体

李さんは、学校が配布するプリントを読むための日本語教材作成を研究の最終目標とし、次の3つのステップで「学校プリント」を解析した。

I: 「学校プリント」の読み方＝読解ストラテジーを解明。どこが重要でどこを読み飛ばしてよいか、などを日本人保護者へのアンケート調査によって明らか

にする。

II: 「学校プリント」を多数収集し、日本語学習支援のためのデータベースを作成する。

III: 外国人保護者にとって「学校プリント」のどこが難しいのかを確認。IIのコーパス^{*1}を利用して分析する。

まず、「学校プリント」の読み方を明らかにするため、プリントを「内容」と「形式」に分け、日本人保護者にアンケート調査を行ったところ、次のような「学校プリントの読み方」が明らかになった。【表1】^{*2}

内容

- ・「日時」「場所」「持ち物」「提出期限」が記載されているプリントを優先的に読む。
- ・切り取り線があり、出欠を問うものは必ず見る。
- ・「学校行事」や「お金に関するお知らせ」は特に注目して読む。

^{*1} 言語資料。個別言語・発話などの情報を大規模または網羅的に集めたもの(『明鏡国語辞典』第2版)。

^{*2} [調査対象:日本人保護者22人(全員女性)、内訳:30代7人、40代14人、50代1人]

【表1】学校プリントの内容と形式

特に注目するプリントの内容	
日時	献立・給食・食育関係
金額	学内のアンケート結果のお知らせ
提出期限	家庭学習について
持ち物	学校が行うイベント
場所	地域が行うイベント
※マーク	健康関係(風邪や病気、生活習慣など)
時間割	学習関係(方法、レベル、定着度、テストなど)
学校行事(学年歴)	出欠に関する部分(切り取って学校に提出する部分)
お金に関するお知らせ(授業で必要なものの購入、学校徴収金、口座振替など)学校からのお願い	

特に注目するプリントの形式
タイトル及びサブタイトル
で囲んである部分
下線が引いてある部分
冒頭部(プリントの説明)
具体的なデータを示す図や表、写真やイラスト
プリントの色(カラーか白黒か)
紙質(わら半紙か上質紙か、ツルツルしている紙、インクジェットか等)

形式

- 枠で囲んである部分を読む。
- 下線が引いてある部分を読む。
- ※をつけている箇所を読む。
- 紙質/ツルツルした立派な紙質にカラー印刷されたものは、チラシや広告が多いので読み飛ばす。
- 紙質/わら半紙は「学校行事」や教室単位のお知らせの内容が多いので見る。

「切り取り線というものを、日本に来て初めて見ました。日本で育ち日本語を母語とする日本人保護者は、幼いころから学校プリントに慣れ親しんでいます。持ち物の項目にプールバッグと書いてあれば『防水機能のあるビニールバッグ』のことだとすぐ理解できますが、海外では、そもそも水泳の授業がないところも多く、布のバッグを子どもに持たせてしまう外国人保護者もあり、日本の学校では常識の範疇に入ることが理解できない場合があります。」

さらに「プリントのタイトル」を九つのカテゴリーにまとめ、「タイトルを見て、一瞬で読むか読まないかを判断できるか」を調査したところ、「判断できる」と回答した日本人保護者が63%もいることがわかった。つまり日本人保護者の多くは、プリントのタイトルを一瞥するだけで読むべき優先順位が高いプリントを選別する力を身に付けていると言えるだろう。【表2】

「子ども本人と直接関係のあるプリント、親が必ず反応する必要があるプリントは優先

【表2】学校プリントに反映される内容の性質

プリントのタイトルの性質
子ども本人と直接関係のあるプリント(学力定着試験の結果のお知らせ「生活習慣の調査」など)
親と学校(またはクラス)と関係のあるプリント(「学習参観のご案内」など)
PTA関係のプリント(「地域委員選出のご案内」,「PTA総会のご報告」など)
地域と関係のあるプリント(「校区文化祭の出演者募集のお知らせ」など)
親が必ず反応する必要があるプリント(保護者会への出欠の提出や家庭訪問, アンケートなど)
学校以外が主催する任意参加のイベントの案内(「防災キャンプ」「自然体験学習」など)
学校がPTAが主催の任意参加のイベントの案内(「読み聞かせ講座のご案内」,「花いっぱい運動のお知らせ」等)
役所からのお知らせ(「保護者相談室」,「就学援助のお知らせ」など)
基礎知識を親に提供するプリント(インフルエンザの予防法や適切な食べ物の摂取についてなど)
その他()

的に読むべきだとわかりました。」

また、プリントの重要性を見分けるコツや読み飛ばすスキルについて自由記述で回答してもらったところ、次のようなコツも判明した。

その他のコツ

- 時節のあいさつは読み飛ばす。
- プrintの発行先の署名欄に、PTA会長が小学校校長の上に書いてある場合はPTA関係が多いので目を通す。
- ほとんどの書類は「記」以下が重要なので、その部分を中心に読む。

「子どもが持ち帰るプリントは全部読まなくてもいいのだと、先にひとこと伝えてくれるだけでも気持ちになります。この調査で、日本人保護者には自明の『学校プリント攻略法』＝短時間で必要な情報を入手する方法を、外国人保護者に示すことができたと思います。」

李さんの研究の独自性は、学校が配布する文書を日本語教育の視点から調査・分析した点にある。学校プリントの「読解ストラテジー」は実にユニークな着眼点で、多くの日本語母語話者にとって「目からウロコ」ではないだろうか。

日本人にとっての常識が外国人にも常識とは限らない

が、外国人保護者に伝える読解ストラテジーとして、短時間で重要な情報を見つける能力だけでは不十分だと李さんは気づいた。学校プリント読解のためには「学校カルチャー語彙」の理解、その背後にある日本の学校文化を明示的知識として伝える必要があるのではないか。

「たとえば日本の給食制度は独特で、海外では弁当の持参や外食、保護者が届けるなど様々なやり方があります。幼少期に日本で暮らしたことのない外国人保護者は給食制度になじみがないため、給食費、献立表、給食開始日、給食袋といった言葉は理解しづらいのです。」

そこで李さんは、学校文書を読解するための日本語学習支援データベース「学校お便りコーパス」^{*3}を構築した(4つの自治体の小学校から延べ810枚のプリントを収集、総文字数88万字超)。さらに継続助成でこのコーパスを発展させ「学校文書コーパス」

へと拡張させた(5つの自治体の保育園・小中学校から延べ1,595枚のプリントを収集、152万字超を追加)。

このデータベースによって品詞ごとの出現頻度と共起関係(文章中にある単語が出たとき、同時に出現する単語が存在する関係。選挙と出馬、囲碁と打つ、など)を分析することができる。まず李さんは「学校お便りコーパス」から名詞2,186語を抽出し出現頻度の上位20語を明らかにした。「人参」や「牛乳」など給食・食育領域の名詞の出現頻度が高いことがわかる。【表3】これらは学校プリントの特徴語には違いないが、李さんが着目したのは「複合名詞」だ。

【表3】学校お便りコーパスの名詞(特徴度上位20語)

出現頻度	見出し語	出現頻度	見出し語
1	日(二チ)	11	金(キン)
2	月(ガツ)	12	保護
3	会	13	児童
4	学校	14	玉葱
5	学年	15	砂糖
6	人参	16	学習
7	給食	17	緑
8	牛乳	18	御飯
9	醤油	19	年(ネン)
10	委員	20	年度

「中国語母語話者の保護者は、漢字文化圏という点から、非漢字圏の保護者より日本語理解が比較的有利だと考えられています。そこで中国籍の保護者3名(いずれも30代女性。日本語力は中級～上級)にインタビューを行ったところ、『中国語と同じ漢字語彙が使われていても組み合わせによってよくわからないことがある』という声が共通した意見でした。『自然』と『教室』はどちらもわかるが、『自然教室』(地域によっては『自然学校』)は初めて見たときはさっぱりわからなかった、と言うのです。学校プリントのわからなさは、複合名詞にある



^{*3} 学校お便りコーパスは一般公開されている。
http://lixiaoyan.jp

のではと推察しました。」

そこで李さんは学校お便りコーパスを使って17,193語の複合名詞を抽出し、李さん自身の経験を踏まえて「学校の文脈から離れると意味がわからない」複合名詞を「学校カルチャー語彙」と定義し、出現頻度の高い順に50語を明らかにした。【表4】

さらに中国人留学生(大学院生、いずれも日本語能力N1)*⁴に学校カルチャー語彙上位50語の意味を書いてもらったところ、正解率はいずれも40%前後だった。日本語能力は高いのに、学校カルチャー語彙の理解力は低いことがわかった。たとえば「集団登校」は「仲良しの児童と一緒に学校に行くこと」「不良の集団が学校に行く」などの回答があった。また「鍵盤ハーモニカ」は誰も知らなかった。「私自身、日本の幼少児童教育では当たり前の『クーピー®*⁵』も『鍵盤ハーモニカ』も、実物を見せてもらうまで一切知りませんでした。」

*4 Nnは日本語能力試験(JLPT=Japanese - Language Proficiency Test)のレベルを示し、高い順にN1～N5にランク付けされる

*5 サクラクレパスの登録商標

継続助成では、さらに大規模な調査を実施し、日本人母語話者93人、外国人60人を対象としてアンケート調査を行った。*⁶調査対象者は保護者として学校カルチャーを経験していない者に限った。保護者の経験としての知識でなく、より一般的な理解度を確認するためだ。外国人調査対象者の日本語能力は全員N2以上だった。

調査の結果は【図1】の通りで、日本人の正答率は80%、外国人の正答率は45%だった。保護者としての経験がなくても8割の日本人が学校カルチャー語彙を理解していることがわかった。また、外国人の理解度が50%以下の語彙を次の4つのカテゴリーに分類した【()内は正答率】。

- 1) 外国でも類似したモノ・コトがあるが、別の言い方で表す
連絡帳(17%)、朝読書(32%)、通学路(37%)、校区内(32%)

*6 国籍別:中国(41人)、韓国(4人)、スペイン・フランス・ベトナム・トルコ・アメリカ(各1人)。有効回答数:日本人母語話者93人、外国人50人

いわゆる「連絡帳」はあるが、「連絡帳」とは名づけられていない。児童の連絡先をまとめた一覧表(連絡簿)などを想起させる可能性があり、誤解を生む可能性がある。

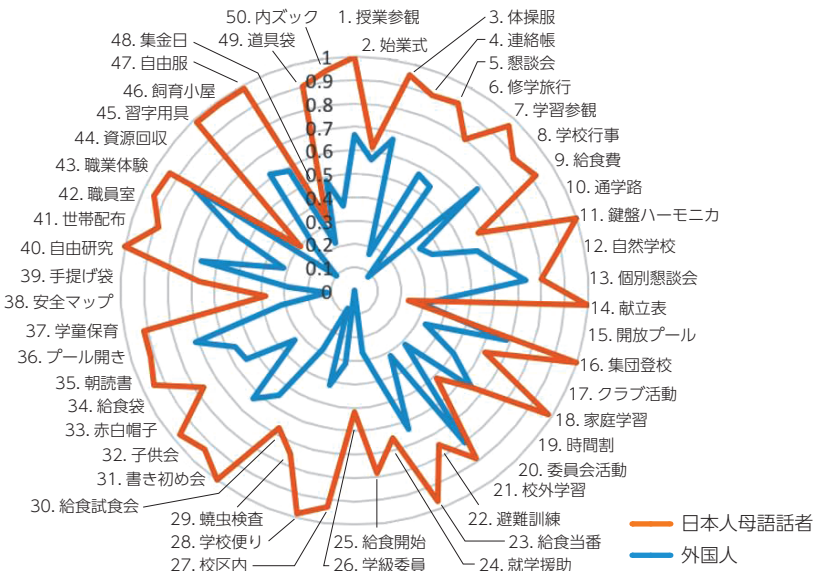
- 2) そもそも外国で存在しないモノ・コトである
給食費(33%)、献立表(42%)、給食開始(27%)、給食試食会(27%)、クラブ活動(33%)、委員会活動(32%)、避難訓練(32%)、学級委員選出(0%)、その他
給食制度は日本独特の要素が多いため、理解度が低い。
- 3) そのモノ・コトはあるが、指しているモノ・コトが違う
資源回収(10%)、習字用具(23%)、開放プール(30%)、安全マップ(12%)、手提げ袋(28%)、道具袋(48%)、集金日(22%)
「安全マップ」は日本では危険な場所や安全な場所を児童に示すものだが、外国では避難場所や避難経路を示したものを指す。
- 4) 漢字の多義性から生じる誤解
「学級閉鎖」(8%)、学校便り(42%)
「同級生」という語は多くの外国人が知っているため、「学級」を「学年」と混同し、「学級閉鎖」が「学年全体が休みになること」と解釈される。「便」は交通手段を表す「便」だと勘違いし、「学校便り」は「学校へ行く交通手段」と誤解される。

「外国人保護者を支援する場合は、言葉のみの支援より、学校カルチャーを含めた日本の教育制度、学校事情、学校行事など日本人にとっては当たり前の事項を明示的に伝えるほうが効果的だと思います。たとえば給食文化に関しては次のような説明ができます。一 始業式の翌日は『給食開始日』が多く、子どもは毎日家庭からお箸とランチョンマットを入れた『給食袋』を持参して学校に行く。『給食費』は保護者に負担してもらう食材費のことである。」

続けて、
「子どもが給食当番になると、給食配膳のとき身に着けるエプロンと三角巾を週末に家庭へ持ち帰ります。学校プリントに洗濯をしてくださいと書いてあるのでそうしていましたが、ある日子どもが“お母さん、友だちのお母さんはアイロンをかけてるんだって”と教えてくれました。なるほどそういう暗黙のルールがあるのか、と知りました。」

【表4】学校カルチャー語彙・複合名詞 50

1	授業参観	11	鍵盤ハーモニカ	21	校外学習	31	書き初め会	41	世帯配布
2	始業式	12	自然学校	22	避難訓練	32	子供会	42	職員室
3	体操服	13	個別懇談会	23	給食当番	33	赤白帽子	43	職業体験
4	連絡帳	14	献立表	24	就学援助	34	給食袋	44	資源回収
5	懇談会	15	開放プール	25	給食開始	35	朝読書	45	習字用具
6	修学旅行	16	集団登校	26	学級委員	36	プール開き	46	飼育小屋
7	学習参観	17	クラブ活動	27	校区内	37	学童保育	47	自由服
8	学校行事	18	家庭学習	28	学校便り	38	安全マップ	48	集金日
9	給食費	19	時間割	29	蟻虫検査	39	手提げ袋	49	道具袋
10	通学路	20	委員会活動	30	給食試食会	40	自由研究	50	内ズック



【図1】学校カルチャー語彙理解度調査の結果

日本の学校文化と 隠れたカリキュラム

先行研究によれば、主に教師の無意識的・無自覚的な言動により、暗黙知として生徒へ伝わっていく知識・価値観、および行動様式などは「隠れたカリキュラム」と定義されているようだ。日本の学校の隠れたカリキュラムには①平等主義的教育 ②長い導入と動機付けの優先主義 ③学習習慣・態度の形成 ④集団や仲間関係の重視 ⑤型から心へのアプローチ の5つが挙げられているという。

日本の小学校における「隠れたカリキュラム」を明示化するため、李さんは埼玉県のある自治体の、新入学児童のための保護者説明会資料を分析した。その結果、入学説明会資料のトピックは「通学」「安全」「登下校指導」「保健」「給食」であり、最も多く使われた言葉は「慣れる」であった。

「通学」や「給食」など日本の小学校の特徴的な事柄に対して、子どもたちが直接経験する前から、まず本人でなく保護者を対象に説明会を行い、保護者を通じて子どもに伝え、「集団登校」などの学校の状況に参加させつつ、見よう見まねで学んでいくようなアプローチ(=長い導入と動機付けの優先主義)がなされていることを明らかにし、次のように考察した。

「日本の小学校へ行くと、どここの小学校にも似通った空気が漂っていると感じます。同じような廊下で、教室に入ると黒板の上に『みんな仲良く』とか『いつも正直に』とスローガンが貼ってある。教室の後ろにはたとえばリンゴの木があって子どもたちの顔写真と並べて夢や抱負が書いてあり、皆が一本の木になっている。誰が上位だ下位だという順番がなく全員でひとつのものを形づくっているのが日本的だなと感じました。」続けて、

「実はコーパスを作る際に、収集したプリント内容に地域差があるのではないかと、方言が使われているのではないかと予想していたのです。結果、そういうものはほとんどなく日本の公立初等教育の均質性・平等性に感心しました。」さらに、「面白いと思うのは専用のバッグがたくさんあることです。手提げ袋、習字バッグ、裁縫バッグ、体操袋、給食袋、etc. 外国なら



▲「研究成果をまとめた本は、ある大学の日本語教員養成プログラムの教科書として使われることになりました。外国人を支援する多くの人に読んでもらいたいですね。」

ひとつの大きなバッグになんでもポンポン放り込むのでしょうか、几帳面さというか整理整頓を身につけるトレーニングを子どものころから受けているのですね。特に大きな特徴だと感じているのは、体から心へのアプローチです。体育の授業で体育館に入ると、日本の子どもたちは膝を曲げた山座りをします。大学の学生にも授業で話しましたが、海外へ修学旅行に行った日本の生徒たちがみな同じ座り方をし整然と並んで話を聞いている様子がSNSで拡散され話題になったことがあるのです。座り方、人の話を聞くときの態度、挨拶など、初等教育で身につけた型や体のトレーニングが行動様式になっていき、それが協調性や勤勉さにつながっているのでしょうか。隠れたカリキュラムは子どもが暗黙的に身につける経験の総体です。」

外国にルーツをもつ子どもたちは 支援されるだけの存在ではない

外国人保護者が学校プリントを読むためのストラテジーを、短時間で重要な情報を見つける能力と、プリントに埋め込まれた隠れたカリキュラムを含む日本の学校文化を把握し発行側の意図を的確につかむ能力、だと結論づけた李さん。今年の春には研究成果をまとめた『学校プリントから考える外国人保護者とのコミュニケーション』(李曉燕編著、くろしお出版)を発行した。内容は「外国人保護者の声」「学校教育現場の

先生の声」「外国人保護者を支援する視点から」の3章からなり、複眼的な視点で外国人保護者支援の課題をとらえることができる。

「時間はかかりましたが、成果を還元することができてホッとしています。」

さらに、この研究成果を小中学校の教育現場に発展させたいと、今後の抱負を語ってくれた。

「外国人保護者もそうですが、外国にルーツをもつ子どもたちは、支援されるだけの存在ではありません。彼らはクラスメートに違う視点を提供できますし、違う言語を提供できます。外国人児童がもっているものを活用できれば、日本人の子どもたちにとっても得られるものがあるはずです。多言語多文化共生を視野に入れた提案をしていきたいと思っています。」



▶『学校プリントから考える 外国人保護者とのコミュニケーション』(李曉燕【編著】 くろしお出版 2023年3月)



研究代表者

まつ い

松井 かおり氏

朝日大学

保健医療学部 健康スポーツ科学科 教授(英語教育)

留学生別科 別科長

第9回 研究助成

海外にルーツがある子ども達のドラマ活動の意義と可能性
岐阜県可児市の多文化共生プロジェクトの事例から

[助成期間] 2014年4月～2015年3月

海外にルーツがある子どもたちのために
新しい学びの場を提供したい

松井さんが助成研究に応募したきっかけは、子どもたちの表情の違いを目の当たりにしたことだったようだ。

「10年前、在外研究で移民大国のオーストラリアとカナダに行き、海外にルーツがある子どもたちの補習校などを視察、観察調査しました。英語力が不十分な子どもはたくさんいましたが、みな表情が明るく将来の夢をいきいきと語ってくれました。」

帰国後、松井さんは生まれ故郷である岐阜県内の高校に足を運んだ。

「日本で暮らす海外ルーツの子どもたちがどのような生活を送っているのか自分が何も知らないことに気づいたのです。当時から岐阜は外国人集住地区が多く、日本の学校に通っている児童生徒は珍しくなかったのですが、見えていませんでした。訪ねた高校は生徒の半数が海外ルーツの子どもたちでしたが、表情が暗くネガティブな印象を受けたのです。先生から退学者も多いと聞き、海外ルーツであることは同じなのにこの違いは何故なのだろう、と。」

ドラマ活動の場に
子どもたちを成長させる何かがある

そのころ出会ったのが「ドラマ活動」公演のビデオだったという。

「ドラマ活動は『多文化共生プロジェクト』と呼ばれ、岐阜県可児市にある文化創造センターで実施されている市民参加型の演劇事業です。地域の日本人住民と外国人住民の出会いと交流の場を作ることを目的に発案されました。舞台の上で楽しそうに歌い、踊り、自分のことを語る子どもたちの姿を

ビデオで見て、学校での印象とはずいぶん違うと感じました。ドラマ活動の場でやっていることの中に、学校生活の場でも彼らがポジティブになれるヒントがあるのではないかと思い、私自身もプロジェクトに参加し、助成研究で活動そのものを観察分析することにしましたのです。」

観察対象としたのは、「多文化共生プロ

ジェクト」参加者43名(サポーター含む)*1のうち、海外にルーツをもつ小学生から高校生までの21名。【表1】

観察・調査方法は次のとおりだ。

- ・フィールドノートによる記録
- ・ビデオカメラでの録画、一部音声レコーダーによる録音
- ・相互行為が見られる場面の抽出と発話の

*1 成人参加者10名の内訳:外国人3名/参加している子どもの母親、外国人1名・日本人6名/うち1名は知的障がい者。7名のうち6名は過去の多文化共生プロジェクトに2回以上の参加経験あり。

【表1】プロジェクトに参加した子どもたち一覧

名前	性別	年齢	ルーツ	家庭内使用言語	過去の参加経験	参加プロジェクト活動
#1 A子	女	9	※ブラジル	ポ語	無	①a①b ② ③ 舞台
#2 E子	女	9	ブラジル	ポ語	無	①a①b ② ③ 舞台
#3 M	女	12	ブラジル	ポ語/日本語	無	①a①b ② ③ 舞台
#4 M子	女	11	ブラジル	ポ語/日本語	有	①a①b ② ③ 舞台
#5 Y美	女	15	※ブラジル	ポ語/日本語	有	①b ② ③ 舞台
#6 R	女	16	※ブラジル	ポ語	無	③ 舞台
#7 K	女	10	フィリピン	日本語	無	①a①b ② ③ 舞台
#8 K男	男	8	フィリピン	日本語	無	①a①b ② ③ 舞台
#9 N男	男	7	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#10 M紀	女	7	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#11 A莉	女	7	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#12 Y香	女	8	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#13 Y	女	9	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#14 H美	女	17	フィリピン	日本語	無	③ 舞台
#15 B子	女	9	※フィリピン	英語/タ語	無	①a
#16 E美	女	12	※ペルー	ス語(日本語)	無	①a
#17 S子	女	7	※ペルー	ス語(日本語)	無	①a
#18 A美	女	14	※ペルー	日本語/ス語	無	②
#19 R恵	女	12	※ペルー	日本語(ス語)	無	②
#20 A奈	女	9	ペルー	日本語(ス語)	無	②
#21 Z子	女	7	ペルー	日本語/ス語	無	②

・子どもたちの名前は全て仮名である。

・ルーツとは、本人の国籍ではなく、両親あるいは片親の出身国を表している。また国名に付加された※は、その子どもが日本生まれではなく学童期に来日したこと、あるいは日本生まれであっても、一時帰国の経験があることを示している。

・ポ語はポルトガル語、タ語はタガログ語、ス語はスペイン語を表す。()で括られた言語は使用頻度が低いことを表す。

/で併記された言語は、同頻度で使用されることを示す。

書き起こし。活動の種類やコミュニケーションのタイプ、頻度の現れ方の比較

- ・海外にルーツがある子どもたちへのアンケート調査、聞き取り調査。質問内容は生活習慣、家族環境・言語使用状況などについて
- ・自由語りの半構造化インタビュー。*2保護者への聞き取り
- ・プロジェクトへの出席率が高い子どもについては、焦点児童としてプロジェクト開始時から終了後まで学校参観と家庭訪問を継続的に行き、追跡調査を実施

*2 質問事項をある程度設定して行われる自由度の高いインタビュー。

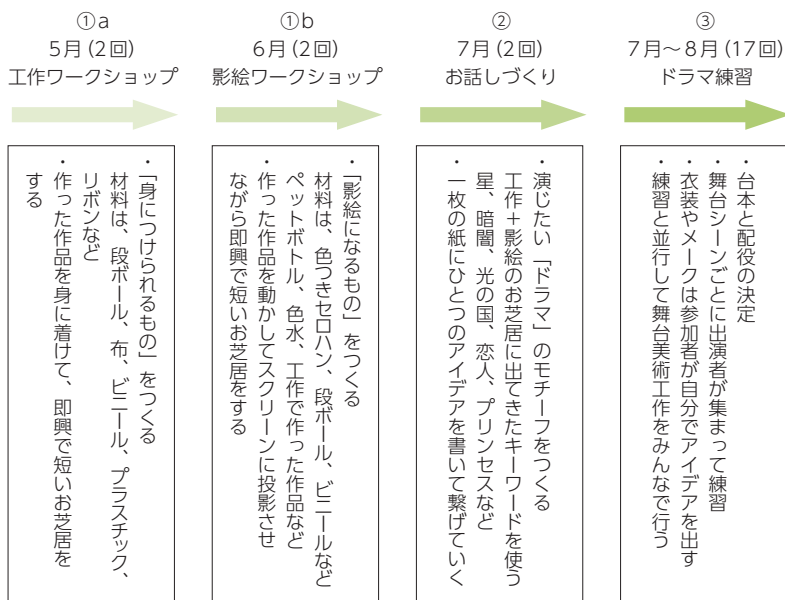
プロジェクトタイトルは「おはなし工作ものがたり2 星くず降る夜の大ぼうけん」で、活動は【図1】のような流れで実施された。最初に台本を与えられて演じるのではなく、参加者が共同で台本を創りあげていくプロセスに時間をかけるのが特徴だ。

まずワークショップで小物や小道具などを作りながら即興劇をやってみて、その過程で浮かんできた物語の断片やアイデアを収集して台本が創られていく。そして、プロの技術スタッフが照明、音声、音効で協力し、衣装や舞台美術も意匠を凝らし、本格的な舞台を観客の前で上演するのだ。最終的に台本は、ワークショップの過程で多数の子どもたちが好んだ「暗闇」「光」「プリンセス」「お花」のイメージをモチーフに、演出家がファンタジーにまとめた。

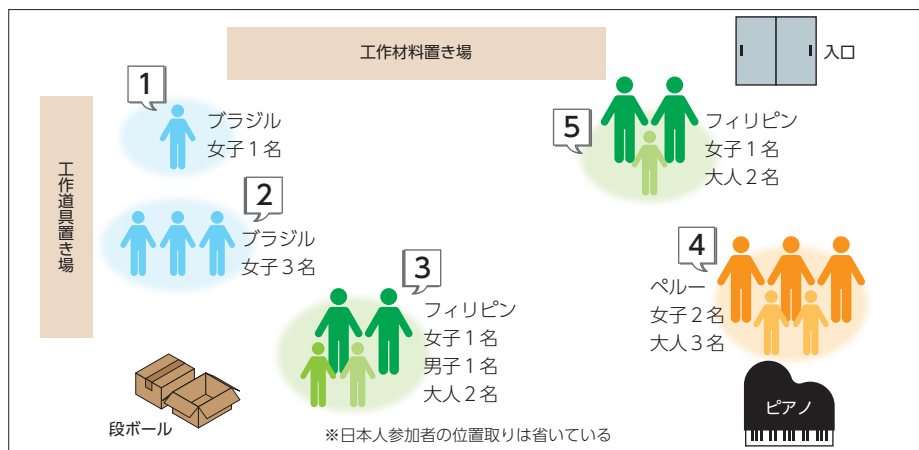
子どもどうしなら 自然と仲良くなるわけではない

松井さんはワークショップ活動を観察しながら、参加者の子どもも大人も、毎回同じエスニック(民族)グループや個人グループに分かれ固定化した位置取りで工作作業に取り組む姿を見て「演技とは直接関係のない、参加者どうしが互いを知り合う機会が少ない活動が一定期間行われることに疑問を感じた」と言う。そこで活動風景を録画したビデオ映像から、工作活動の場にはどのようなコミュニケーションがあったのかを分析した。

その結果、「黙々と作業活動をするだけ」という印象とは異なり、「道具や材料を貸し借りする」「人手が必要な作業を手伝う」「近づいて作品を覗き込む」「座り込んで話をする」など様々な相互行為が行われていたことが確認された。【図2、表2】



【図1】多文化共生プロジェクトの活動段階



【図2】工作ワークショップ時の作業位置

【表2】工作ワークショップ1日目と2日目のコミュニケーション

来訪者の行動		1 (ブラジル 女子1名)	2 (ブラジル 女子3名)	3 (フィリピン 女子1名 男子1名 大人2名)	4 (パルー 女子2名 大人3名)	5 (フィリピン 女子1名 大人2名)
道具(材料)を渡す/返す	1日目	■(3)	■(2)			■(2)
	2日目	■(1)	■(2)	■(2)	■(1)	■(1)
作業の手伝いをする	1日目	■(2)	■(2)			
	2日目	■(2)	■(1)			
近づいて見ている	1日目	■(6) ▲(1) △(2) ○(1)	■(5) □(1) △(3) ○(1)	■(2) △(1)	■(3) □(1) △(2)	■(4) □(1) △(2)
	2日目	■(6) ○(3) △(3)	■(7) △(4)	■(4) △(3)	■(4) ▲(1) △(2)	■(6) ▲(1) □(1) △(2)
話をする	1日目	■(4)	■(3)	■(1)	■(2)	■(2) □(1)
	2日目	■(4) ○(3)	■(3)	■(4)	■(5)	■(3) □(1)
作品を触ったり身につけてみたりする	1日目	■(3)	■(2)	■(1)	■(1)	■(4) □(1)
	2日目	■(3) ◎(1)	■(2) ◎(1) □(1) △(2)	■(2) □(1) △(2)	■(2) ◎(1) □(1) △(1)	■(2) □(1) △(2)

※◎は同じエスニックグループ大人 ○は同じエスニックグループ子ども ■は日本人大人 □は日本人子ども

▲はその他エスニックグループ大人 △はその他エスニックグループ子どもを表す。

()内の数字は、各エスニックグループへの来訪者の人数を表す。

1～5の番号は、図2の工作ワークショップ時の作業位置に相等する。

- 日本人の大人が特に頻繁に外国人グループを訪れていた
- 外国人の大人は、積極的に他のエスニックグループを訪れることはなかった
- 外国人の子どもは、他のグループに近づくことはあっても話しかける行為はほとんどなかった
- 子どもたちが、一緒に作業をしている友だち以外の子と話したり遊んだりする行為は見られなかった

しかし、影絵ワークショップの作業では、次のような変化が見られたようだ。

- 日本人の大人が積極的に外国人の子どもに話しかけていた
- 外国人の子どもは最初、個別に日本人の大人と関わっていた
- 外国人の子どもは次第に、日本人の大人と関わる際に、異なるエスニックグループの子どもたちとも一緒に作業や話の輪に入るようになった

その後「お話しづくり」の過程を経て、ドラマ練習の前には大人がいなくても、子どもどうしが一緒に遊ぶ様子が観察されたようだ。

松井さんはワークショップ活動の意義を、初めて出会う参加者たちが他者との間に、各人にとっての快適な心的距離を保ちながら参加し続けることを可能にし、次第にエスニックグループに関係なく共同できるような関係性を創っていった点で評価できるとし、次のように話してくれた。

「日本人の大人がエスニックグループ間の媒介者になっていたことは興味深いと思います。学校になじめない海外ルーツの子の親御さんに家庭訪問を実施したとき、“子どもは友だちもすぐにできるし、(学校生活は)大丈夫”と断言するのをどう説明すれば納得して貰えるのかとても苦労しました。子どもどうしなら自然と仲良くなるわけではないのです。やはり、媒介者となってくれる大人の存在が必要です。」

「場」そのものの持つ力が子どもたちの成長を引き出す

では、ドラマ練習や舞台公演を通じて、子どもたちにどういった変容や成長が見られたのだろうか。特に小学生の子どもたちの事例についてうかがった。

「日本語は子どもたちにはまだハードルが高



▲「おはなし工作ものがたり2 星くず降る夜の大ぼうけん」の練習風景

く、一生懸命セリフを練習しても難しい様子でした。では、練習するうちに何ができるようにになっていくかという、動作なのです。

プリンセスの役は3人が順番に登場して演じたのですが、最初の子がクルッとターンをして“私はプリンセス”と言うと、次の子は2回ターンしてセリフを言う。3番目の子はわざと回らないでポーズをきめてセリフだけ言う、という具合です。しかも同じ場面であっても練習のたびに毎回つけてくる動作が変わるのです。その場で、即興的にほかの子の動きを見て、自分のオリジナリティを出せるようになってくる。

実は本番では緊張したのか最初の子のセリフが棒読みだったのです。2人目も同じ。あんなに練習したのにとハラハラして見ていたら、3人目の子がこれはマズイと気づいたらしく、舞台中央までダッシュと走って登場し、いつも以上に大げさにポーズをきめました。良かったと胸をなでおろしました。」

先行研究によれば、創造性は個人の資質や才能によるものでなく、他者との関わりや環境に刺激を受けて育てられるものであり、創造的共同性と言われているようだ。「ドラマ活動も、個人一人ひとりが技を磨いて集まり演劇を成立させるというより、その場で起こる即興的な相互の働きかけそのものが全体を押し上げていく、個人も演劇作品もともに変容しつつ高められていく、という捉え方が基本にあると思います。」

そこに、松井さんは海外ルーツの子どもたちのための学校以外の学びの場として、言葉の習得だけでは養えない、彼らに必要な力を育てる教育的活動の可能性を見出した。「台本はあっても動いてみたらどうなるか演出家にもわからない。その場でとにかくやってみる。言葉ができなければ動きだけでやっ

てみせてもいい。言語力や知識の有る無しは関係ない。そこが海外ルーツの子には参加しやすいし、やったことを評価してもらえるし、やれたことで自信がつきます。それに大人にとっても発見があります。プリンセス役の女子3人の例のように、こんな成長の仕方があったのかと。ある研究者は“the end of knowing = 知ることの終焉、知識の偏重をやめましょう”と言っています。新しい学び方の試みだと共感しています。」

プロジェクト参加が学校生活での自信につながる

焦点児童のプロジェクト開始から終了後の追跡調査の結果、本人の変容や成長ぶりはどうだったのだろうか。

A子、9歳。両親は日系ブラジル人

- 日本生まれだが、小学校入学直後に1年半、両親とともにブラジルに一時帰国。日本語の読み書きは苦手だと感じており、教科書の音読は一文字ずつ指でたどって読む状態。同居している兄の家族に同い年のA美がおり、一緒に行動することが多い。父が工場勤務のかたわら教会の神父を務めているため、放課後や休日はほとんど教会で過ごしている。両親やブラジル人とはポルトガル語で話している。

プロジェクト参加中の様子

- ワorkshop初日にA美と連れ立って参加。こわばった表情でひとことも話さない。日本人の大人がずっと傍について話しかけ、一緒に工作をするうちに、鼻歌を歌ったりダンスをしたりする姿が見られるようになり、やがて表情明るく活発にしゃべるようになった。小物や小道具は集中して作成し、自分が作ると宣言した着ぐるみロボットはひとりで最後まで

で作り上げた。即興劇の場面ではA美とともに司会役を名乗り出て、TVタレントのような名調子で場を切り盛りする姿も見られた。

プロジェクト参加中の学校での様子

- 1日中表情が硬く、うなずいたり首を振る以外は表情が読み取れない。背筋を伸ばしてきちんと椅子に座っている。話しかける子もいないし誰ともしゃべらない。国語の時間はプリントに書かれた設問に答えるテストが実施された。A子は文字を読むことに時間をとられ、答えを書くことにすめない。クラスメートが解答を終えて図書館へ出ていく中、ひとり教室に残ってプリントに見入る姿が観察された。担任教諭は「確かに漢字が苦手のようにだが、計算は普通にできる。特に問題を感じていない」と述べた。生活言語が流ちょうな子どもの場合、学習言語の発達の遅れが気づかれにくいという指摘があり、A子もその例であろう。休み時間は隣のクラスのA美、A美の弟と一緒に運動場で座ったり遊んだりしている。

プロジェクト本番の様子

- 音楽にのってコミカルなダンスを披露、喝さいを浴びる。
- A子の担任教諭と校長先生がプロジェクト公演を鑑賞。担任は「あのよう堂々としたA子の姿を見たことがなかった」と述べる。ダンスが上手なら運動神経はいいはずと気づいたようで、秋の運動会のリレー選手に選ばれるきっかけになる。

プロジェクト終了後の学校での様子

- 席の近くのクラスメートと談笑し、授業中にはグループ内の話し合いを終えて発表する姿が見られた。算数の時間には、しつこく「教えてやるぞ」と覗き込んでくる男子に対して「あんたうるさい。今やっているところなの」ときっぱり言いかえしている。担任は「夏以降、わからないことを質問してくるようになった」とA子の態度の変化に気づいている様子。リレー選手として活躍し体育の時間も休まなくなった。

ほかの子どもたちもプロジェクト終了後のアンケートで、次のような回答があった。

- 放課後や休日に、プロジェクトで知り合った人とよく遊ぶ。電話やSNSで連絡を取り合っている(11名)
- プロジェクトで意気投合し、互いの家を行き来している(1名)

- 一時、関係が途絶えていたが、また一緒に宿題をするようになった(1名)
- 学校や自宅が遠いので会えないが、ネットでよくやり取りをしている(9名)

しかも、関わる相手は異なるエスニックグループの子どもだけでなく、日本人参加者、劇場スタッフや演出家、友だちの保護者にも及んでいることがわかった。

さらに、高校生の参加者の中には、台本を書いたり撮影をするような、舞台や映像の制作の仕事に興味を持つ子も現れ「ここに来ると、自分は将来何になるんだろう、何になっているんだろうかと未来を見に行きたくなる」と語ってくれたという。

松井さんは、「多文化共生プロジェクト」の場は、海外ルーツの子どもたちにとって「自分の居場所」であり「将来を期待できる場所」として受け入れられており、ドラマ活動のように、子どもたちのアイデンティティや自尊感情を育てるような学びの場や環境作りがさらに課題になると助成研究をまとめた。

「自尊心を高める、とひとことで言ってしまうがちですが……。自分が伝えたいことや感じたことを表現できる、それを周囲の人間が雑音とせずちゃんと受け止めてくれ、反応してくれる、そういう場がある。日本人には当たり前のことかもしれませんが、それが当たり前ではなかったのが、多文化共生プロジェクト参加前の子どもたちだと思います。」

できることから連携し 地域ぐるみで支える

助成後も松井さんは海外ルーツの子どもたちの成長発達を支えるため、多岐にわたる活動に参加し調査を続けている。

「学校という場だけでは、海外ルーツの子どもたちは支えきれないと思っています。」

助成研究を経て、その思いはさらに強く

なり、2017年には「多文化子どもエデュ niho ☆ nico」を発足。日本語教室のボランティア講師、外国人児童生徒の適応指導員、学生大学教員など地元の有志が集まって活動を開始した。

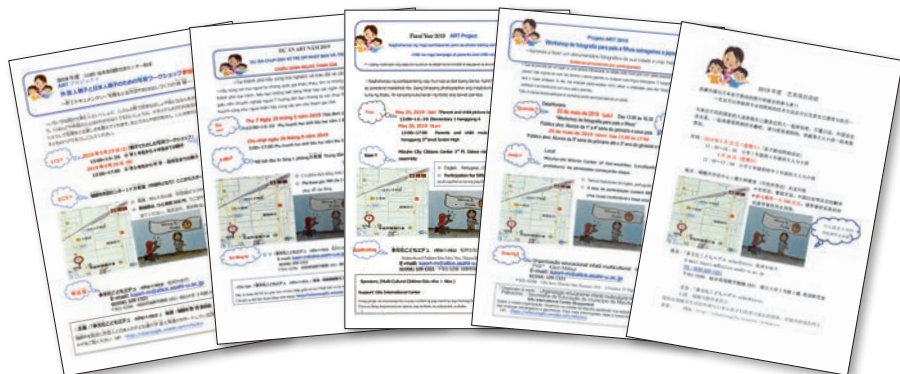
「大学のある瑞穂市(人口5万6千人、外国人の比率4.5%：2022年度末現在 瑞穂市HPより)くらいの規模なら、地域ぐるみで支えていくことができるのではないか、というのが、この10年で見えてきた成果です。」続けて、

「もちろん小中学校の連携は大切です。先生方の協力を得て、海外ルーツの子どもたち一人ひとりのカルテを作って貰っています。一方で市民の皆さんの有償無償のボランティア活動の力も非常に大きいです。Bちゃんの家では赤ちゃんが生まれたばかりで大変そうだ、といった情報が支援員の方からあがり、それを学校の先生に伝える、なるほど最近忘れ物が多いのはそういう事情だったのかと理解できる、という連携ができています。支援者の方たちの研修にも力をいれています。」

niho ☆ nicoの冊子には、イベント案内が5か国語の言葉で掲載されている。

「近隣の自治体や教育委員会とも連携をしているのですが、たいていの学校のお知らせや学校行事は似ているので、案内文のひな型を多言語で教育委員会に作っていただき、各学校に配布し流用してもらう、といったことも始めました。50か国の子どもたちがひとつの学校で学べる対応ができています。トロントのような都市もあります。50か国は無理ですが、翻訳アプリなどIT技術の進歩が著しい今の時代、数か国なら対応できるかもしれません。」

これからも、地域の皆さんとタッグを組みながら、できることから手をつけていきたいですね。」



▲「多文化子どもエデュ niho ☆ nico」のイベント案内。
日本語のほかに中国語、ポルトガル語、タガログ語、ベトナム語に訳されている。



当研究助成への応募について

「児童教育実践についての研究助成」は2005年に「博報『ことばと文化・教育』研究助成」としてスタートして以来、多様な研究を助成してきました。これからも、ことばの教育と実践の研究を支援し、教育の質の向上につなげてまいります。皆さまからのご応募をお待ちしております。

【対象となる研究】

●「ことばの力」を育む研究

- 国語・日本語教育の諸分野における研究
- あらゆる学びの場におけることばの教育に関する研究

●児童教育実践の質を向上させる研究

- 多様な場における教育実践の質を向上させる研究

※対象は小・中学生となります。ただし、児童教育への反映が明確な場合に限り、幼児教育、高校生に関する研究も可とします。

【応募資格】

下記のいずれかに該当する方を対象とします。

●日本の学校・教育委員会に所属する教育実践に携わる方

(例えば教諭、指導主事、相談員、特別支援教育の支援員等。)

●日本の大学・研究機関に所属する研究者

(例えば准教授、講師、助教、博士課程の院生等。若手支援のため、教授やそれに相当する職は除く。)

【助成期間】

●1年間または2年間とします。

応募時に選択のうえ、申請してください。

【助成金額】

●1ヵ年助成……1件につき200万円を限度に助成します。

●2ヵ年助成……1件につき300万円を限度に助成します。

● 詳しくは財団ホームページをご覧ください ●

<https://www.hakuhodofoundation.or.jp/>

博報堂教育財団は、児童に対する国語教育と視覚・聴覚障がい者に対する教育を助成し、

あわせてその活動に関する調査研究を行うことで、

児童および青少年の健全な人間形成に寄与することを目的に、1970年に設立されました。

以降、「子ども・ことば・教育」を活動領域ととらえ、さまざまな活動を行っています。

50回を超える開催となった児童教育の実践者を顕彰する「博報賞」をはじめ

「児童教育実践についての研究助成」「教職育成奨学金」に加え、「海外の子どもたちの日本語教育支援」

「世界の子どもたちの日本語交流」「社会啓発事業(子どもたちの読書機会拡大)」

さらに「こども研究所」などの活動を行っています。

公益財団法人 博報堂教育財団

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 14階 Tel 03-6206-6266 Fax 03-6206-6582

<https://www.hakuhodofoundation.or.jp>

博報堂教育財団

検索

「研究紹介ファイル」は財団ホームページからご覧いただけます。

© 公益財団法人 博報堂教育財団

2023. 07. 01